主日の説教　　◇C 年◇　　担当 佐々木 博 神父

四旬節第４主日・C 年（16.3.6）

「死んでいたのに生き返り
いなくなっていたのに見つかった」

神のいつくしみを深く味わう

「いつくしみの特別聖年」が始まって、早くも三か月目に入りましたが、今日（きょう）、また改めてこの聖年の趣旨を確認する必要があります。実は、教皇フランシスコは、その公布の大勅書において、次のように強調しておられます。

「わたしたちのまなざしを、もっと真剣にいつくしみへと向けるよう招かれるときもあります。わたしたちが、御父の振る舞いを示すしるしとなるためです。これこそ、わたしがこのいつくしみの特別聖年を公布した理由です。」と。

つまり、この聖年の間（あいだ）、特に、神のいつくしみを豊かに体験できるように努めることにほかなりません。そこで、今日の福音は、意味軸もこの神のあわれみを、最も感動的に語っている代表的なたとえであります。

実は、神の憐れみを強調している福音記者ルカは、その福音において、神の失われたものへの限りないいつくみを、三つのたとえで語っております。つまり、失われた羊と、失われた銀貨、そして、失われた放蕩息子であります。

特に今日の福音で語られるこの三つ目のたとえこそ、天の御父の心を最も豊かに描いていると言えましょう。

まず、このストーリーは、父親と二人の息子という家族関係が軸となって展開されます。

つまり、父親と長男と次男という家族関係が舞台設定となっております。

そこで、当時の中近東の家族における父親の財産の相続に関しては、長男が三分の二、次男が三分の一と決まっていたそうです。ただし、父親がまだ生きている間には、双方が受け継ぐことができるのは、もっと少ないということです。

とにかく、たとえは、いきなり、この次男の生き方の問題に入ります。

つまり、父親から、財産の自分の分け前を受け取るやいなや、**「何日もたたないうちに、**

下の息子は、全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りをつくして、財産を無駄遣いしてしまった。」というのであります。

ところで、聖書において罪が語られるのは、「正しさ」の基準からの逸脱（いつだつ）というよりは、むしろあるべき「関係」を保つか、破るかを重視しているようです。ですから、この次男坊の罪の告白、つまり「**お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子を呼ばれる資格はありません。**」においては、彼が、まさに神と父親との関係において誠実でなかった、つまり、本来あるべき関係から、はるかに離れた「**遠い国**」で、自分の惨めな姿つまり、神と父親との関係から遠く離れた所にいる自分に初めて気づくのであります。ですから、彼の、その回心の始まりを「**彼は我に返って**」と端的に描いているのではないでしょうか。すなわち、わたしたちが回心できるのは、自分の神と人との本来あるべき関係から逸脱していることに気づくことから始まるのであります。

それは、自分の思い、考えに捕らわれている殻から脱皮して神を中心にした生き方に根本的姿勢転換することにほかなりません。

とにかく、自分のあるべき関係から遠く離れていることに気づいた彼は、まさになりふり構わず、父親のもとに戻ることを決意したというのです。

この息子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった

その決心にたどりくまでの彼の生き方を、少し詳しく振り替ってみましょう。

実は、この次男坊の父親の許を遠く離れてからの生き方は、なんと放蕩の限りを尽くし、その挙句の果て、ユダヤ人が嫌う豚の世話をしてなんとか生き延びたと、その憐れな生活を描写しています。そこでまず、自分が家出をしたこと自体が、父親の愛を拒否し、侮辱する結果になったことに気づき、その赦しを願い償う方法は、再び父親の許に戻り、つまり立ち帰るしかないことを悟ったのであります。

とにかく、神と父親から離れることは、死と本来の関係からの切断を意味します。従って、神と父親の許に立ち帰ることは、生き返り、あるべき関係を修復することにほかなりません。ですから、父親は、息子を遠く離れていたのに見つけ出し、「**憐れに思い、走りよって首を抱き、接吻した。**」のであります。

ここで、まさに無条件に、息子を受け入れた父親の姿こそ父なる神の深い豊かな憐れみを彷彿とさせるのであります。

そこで、父親は宣言します。

「**この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。**」

ところが、長男ですが、父親の許から片時も離れたことがなかったにも拘わらず、父の次男坊に対してとった態度を全く理解することができませんでした。

「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上(しんしょう)を食いつぶして帰ってくると、肥えた子牛を屠っておやりになる。」

この兄の怒りは、まさに人間的次元での発想にほかなりません。つまり、神の限りない憐れみの世界を、全く悟っていない態度と言えましょう。

実は、知恵の書には、すでに神の憐れみについて次のような見事な説明が語られております。

「全能のゆえに、あなたはすべての人を憐れみ、
回心させようとして、人々の罪を見過ごされる。
あなたは存在するものすべてを愛し、
お造りになったものを何一つ嫌われない。
憎んでおられるのなら、造られなかったはずだ。
あなたがお望みにならないのに存続し、
あなたが呼び出されないのに存在するものが
　　果してあるだろうか。
命を愛される主よ、すべてはあなたのもの、
　　あなたはすべてをいとおしまれる。」（知恵の書 11.23-26）

最後に主ご自身、次のように命じておれらます。

「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」（ルカ 6.36）

今週もまた、一人ひとりが、そして共同体ぐるみで、神の深く限りないいつくしみを豊かに体験できるよう共に祈りましょう。